

目次

1. 事務局より
2. 前年度編集責任者より
3. 新編集委員より
4. 本年度編集責任者より
5. 運営・企画担当より
6. 例会予定
7. 各地の研究会だより
8. いま、フランスでは...
9. メーリング・リスト frenchling について
10. 編集後記

1. 事務局より

事務局は引き続き福岡大学人文学部におかれています。事務局としての業務は、福岡大学と西南学院大学との協力で行っています。

住所や所属機関等に変更があった場合は、事務局宛に電子メールか郵便で、できるだけ早くご連絡をお願いします。転居先不明で郵便物が戻って来るケースが増えています。

〒814-0180 福岡市城南区七隈 8-19-1

福岡大学人文学部内

日本フランス語学会事務局

メールアドレス：sjlf@fukuoka-u.ac.jp

学会誌の「雑誌論文目録」あるいは「修士・博士論文目録」の欄に掲載を希望される場合、できれば2月末までに、事務局宛に電子メールでご連絡ください。

本年度あるいは過去年度の会費をまだ納入されていない方は、下記の郵便振替口座に振込をお願いします。

郵便振替口座番号 00160-6-56308

2年以上会費を滞納された方には、学会誌『フランス語学研究』はお送りしておりませんのでご注意ください。また退会をご希望の場合、退会のご連絡をいただいた年度の会費もご納入いただくことになっております。

『フランス語学研究』のバックナンバーの販売はフランス図書に委託しています。購入希望の方は直接同書店にお問い合わせください。

〒160-0023 新宿区西新宿 1-12-9 フランス図書

電話：03-3346-0396

過去の会費をご納入いただいたにもかかわらず学会誌をお受け取りになっていない場合は、お手数ですが事務局までご連絡ください。複数年の会費を一度にまとめてお支払いいただいた場合に時折このような問題が発生します。なおご入会年度より前のバックナンバーは、フランス図書でお求めになってください。

日本フランス語学会の例会は原則として、4月から12月まで(8月を除く)、毎月第3あるいは第4土曜日、15時から18時、慶應義塾大学三田キャンパス(2008年度)で開催されます。通例、11月の例会は京都が開催地となります。例会についての詳細は学会ホームページ(<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>)、メーリングリスト(入会登録: frenchling-owner@yahoogroups.jp)の他、月刊『言語』(大修館)と『ふらんす』(白水社)でお知らせをしています。ご来場にあたっては、事前に日時や場所をご確認ください。なお、春の仏文学会のおりの例会や、シンポジウム、特別発表等に関しては会員の皆様全員に郵送によるご案内もしています。この郵送の仕事は現在、広島大学の井口容子氏にお願いしています。

2. 前年度編集責任者より

前回のニュースレターでは、編集責任が初めて関門海峡を越え、歴代で最年長だという“自慢”をしました。二度あることは何とやらで、そのあとすぐに勤務校で文学部長に選任され、さらに“自慢”の種が増えてしまいました。そんなわけでスケジュール的には薄氷を踏むような1年でしたが、この原稿を書いている4月20日現在、『フランス語学研究』42号の編集も何とか2校の段階に入っています。

42号の編集後記から引用します：

「思うに任せないことばかりでしたが、第42号をお届けすることができてホッとしています。改めて、日本フランス語学会の会員の皆様、とりわけ執筆者・編集委員の皆様の熱意・能力に敬意を表します。また、割付など煩わしい作業に笑顔でご参加いただいた時には、あと数年は頑張れそうな若々しい気分になりました」

しかし、今までの周縁的な立場から編集の中心に位置してみると、日本におけるフランス語学研究がかな

り厳しい状況を迎えていることも実感させられました。若手がなかなか育たず、いつまでもベテラン研究者の無償の努力に依存している傾向があります。逆に若く優秀な人がたまたま編集委員になると、どうしてもそこにしわ寄せが行くということになり、教育・研究の時間を奪う恐れがあります。

勤務校での中間管理職として、受講者数の少ない科目は閉講せよなどという圧力を受けるのですが、全国的にもフランス語学のポストの増加は見込めない現状でしょう。現在、東郷雄二氏をはじめとする何人かのご努力下、日本フランス語学会を日本学術会議の「協力学術研究団体」へ登録申請するべく準備中で、会員の皆様には返信用ハガキで意思をお知らせいただくようお願いしています。これも、フランス語学会の「活動がより社会的な広がりをもつために有効だと思いますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。

今までほとんどタッチしてこなかった学会誌編集をやってみて感じたのは、その業務負担に偏りがあるということです。私自身、九州在住を盾に取りそっぽを向いてきたわけで反省するしかないのですが、やはり何かにつけ東京近辺の方達の負担が大きいと言わざるを得ません。幸い関西勢の活発な参加があり、このところ関東と関西が仕事をかなり分担するようになっていきます。さらに例えば、編集責任者が関西圏の場合は、投稿論文の査読会議や割り付け作業を関西で行うことも考えられるでしょう。

負担と言えば、これまでもっぱら担当者ひとりが苦勞してきた「海外雑誌論文目録」作成も編集委員全体が協力できる方向で工夫されるようになりました。初めての試みで、かえって負担が増した部分もあるかと思いますが、今後さらにスムーズな運営を心がけます。いずれにしても、これまで担当なさってきた編集委員の方々に感謝の念を捧げたいと思います。

また、ITが進歩・普及した現在、パソコンやインターネットを最大限利用して負担軽減を図るべきだと思います。42号編集から、フロッピーによる投稿論文の原稿提出を廃止し、メール添付でよいことにしました。執筆者への査読コメント送付も同様にメール添付の形で行いました。いろいろ冷や汗をかく失敗もありましたが、試行錯誤を重ねて安定した作業方法を完成させていくしかありません。以上のような変更を踏まえて「投稿規定」と「執筆要項」がかなり変わりましたので、42号でご確認をお願いします。

最後に、とりわけ重要な変更点をお知らせしておきます。「投稿規定」の11.にある原稿提出締め切り日が今までの10月末から11月末に変わりました。いろ

いろな事情による修正ですが、何より論文執筆にかける時間が増えたことで、論文等の投稿数が増えることを期待しています。

(西村 牧夫)

3. 新編集委員より

◆ 青井 明 (国際基督教大学)

今年度から編集委員を担当することになりました。よろしくをお願いします。

実は、1987年～1995年にも編集委員をしたことがあります。それからすでに13年も経過していますし、委員のメンバーも変わり、編集作業も以前とは相当変化しているでしょうから、初心に帰って臨みたいと思います。

この13年の間には、大学の方で、科長や学生部長をやったりして、学務に忙しく、心ならずも、例会に参加できない時期もありましたが、できるだけ例会にも出席し、より多くの人との出会いを楽しみたいと思います。

さて、2007年7月初旬から3週間、ケベック州政府の招聘で、モントリオールで開かれたスタージュに参加しました。スタージュそのものの目標はフランス語教員の再教育にあるのですが、私自身の関心は、他にも実際のカナダのフランス語に接することにあります。実は、大学の講義では、カナダのフランス語の話もしているのですが、私自身はカナダのフランス語に接した経験はなく、大変に興味があったのです。スタージュでは、カナダの文学、歴史などの紹介とともに、カナダのフランス語についての講義もありました。何よりも、モントリオールの人たちのフランス語が、発音や語彙の面で、本国のフランス語とは違っているのを如実に体験できたのは大きな収穫でした。これによっても、改めて、言語研究における、フィールド・ワークや、実際のネイティブ・スピーカーの反応を知ることの重要性を思い起こしました。普段はつい論文や著作、辞書などの資料に頼ってしまいましたが、やはり、机上の理論だけでなく、ネイティブ・スピーカーの実際の語感・反応などを十二分に考慮しなければいけないと痛感しました。

私自身のことを多少記せば、学部の論文では、サウンド・スペクトログラムによる、日仏語の音声分析を、修士論文では、フランス語動詞の形態音韻論的分析を、そして、博士論文では、日仏語のテンス・アスペクトの対照研究をしてきました。なるべく、色々な分野を幅広く渉猟してきたつもりですが、最近の関心は意味論や構文論にあります。しかし、大学では社会言語学

の講義も担当しており、フランスの言語政策にも興味があります。

最近、小野文氏の”La notion d'énonciation chez Emile Benveniste”(Lambert-Lucas, 2007) という本を読んでおり、バンヴェニストを通して改めてソシュールの言語理論を考え直しています。実は、小野さんはICUの卒業生で、学部のととき卒論指導をしたことがあるのです。その小野さんがパリ第十大学に博士論文を提出し、それが上梓されたことは喜びに堪えません。まことに、後生畏るべしというべきでしょう。

フランス語学会でも、新しい人たちが、次々に発表したり、論文を書いたりしています。新編集委員として、そういうお手伝いを多少ともできるように祈念しています。

◆ 佐野 敦至 (福島大学)

この度編集委員の1人に加えていただくことになりました。この委員会には最高クラスの会員でなければ名を連ねることができないものと思っておりましたので、私のような凡才には無縁のことと気楽に過ごしてきました。これまで学会のために何をしたかと言われると、会費を納めてきたことと、数年前に「話し言葉をめぐって」というシンポジウムを企画し司会したことくらいしか思い浮かびません。これからは雑用係として少しでも皆様のお役に立てるよう努めていきたいと思ひます。

院生時代に Côte d'Azur で3年間も過ごしたのが、躰きの始まりか、連日の青い空、碧い海に「人生何とかなるものさ」と、すっかり楽観的になってしまい、さしたる成果も上がらぬうちに「少年易老」のことばどおり齢を重ねることとなりました。ある時期から、練り上げられた書き言葉よりも日常一般人に使われている話し言葉の方に言語の本質が見つかるのではないかと考えるようになり、2002年に在外研究を許されたのを機に Aix-en-Provence に押し掛け、この分野では先進的な Delic チーム (旧 GARS の流れを汲む) に加えてもらいました。今から考えれば、見ず知らずの日本人をよくもまあ受け入れて2年間も置いてくれたものだと思います。そこでいろいろな研究に接し、膨大なコーパスに触れ、また自らもコーパス作成作業に加わる中で、その面白さ、大変さがわかってきましたが、未だに成果を還元するに至っていないのが恐縮の極みです。

幸いグループとの関係は持続しています。話し言葉研究に関心のある皆様には仲介役として何かの役に立つのではと思います。語学会の中でも話し言葉につい

て研究会等、企画していきたくて考えておりますので、よろしくお願ひします。

◆ 塩田 明子 (慶應義塾大学非常勤)

塩田明子という名前を見て「あいつか!」とピンとくる方 (有難うございます) もそうでない方もおいでだと思います。(昨年度、実は例会をお休みすることが多かったせい・・・だとすると反省しなければなりません。)「時制ばかりやっていて、ここ数年は発表というカセットテープで音声を聞かせる奴」でおわかりになる方もいるかもしれません。もっとさかのぼると、半過去についての発表中に「パニックっちゃった (=パニック状態に陥ってしまった)」とパニックたあまり言ってしまった若い娘 (当時) です。

褒められることかどうかわかりませんが、学部の卒論で近接未来を扱って以来、ほとんど浮気することなく動詞の時制ばかり追っています。コーパスを話し言葉にかえても、やはり気になるのは時制で、物語体現在やその周辺要素が興味の対象です。学生に「どうして時制なんですか」と訊かれることがあると返答に窮するのですが、時制が好きです。一度始めたものはなかなかやめられない (固執する? 根気強い?) という性格によるところもあるかもしれません。

ただ勿論、他のことに興味を抱かないわけではありません。ごく最近では、甥が二語文を使うようになり、これは日本語の話になるかもしれませんが、子供の言語習得過程が気になります。否定・拒否は今のところ「まめ (駄目)」「ばっばい (ばいばい)」しかないのですが、これがこの後どう分化・変化するのか、「～する」「～した」「～ている (た)」はいつ頃どんな風に出てくるのか、等々。また小さいうちからイントネーションが重要な位置を占めるらしいことは、言葉とはまだいえない「声」を発しているときの音の「メロディ」が、我々大人の話している言葉のイントネーションそのものであることから想像されます。フランス語で *ça va ?* とか *tu comprends ?* と問いかけると、フランス語を解さないはずの彼が「はいっ」と返事をするのもそのためでしょう。

「親ばか」ならぬ「伯母ばか」の話が長くなりましたが、今回、編集委員に・・・とお話をいただいた時には、半分耳を疑ってしまいました。語学会において、私の世代は「一番の若手 (=下っ端)」という錯覚をずっと持っていましたし、私について言えば、大学で教えて食べているとはいえ、非常勤講師ばかりですし、論文だってどうにもさえません。能力的には、今でも

「一番の下っ端」を自負しています。その私が、編集委員などという大役を務められるとは・・・今でも自信はないのですが、強いて編集委員に向いている長所をいうとすれば、「声大きい」と「根気強い(上記)」ことでしょうか。皆さんの足手まといにならないように、そしてフランス語学の発展のためのお手伝いが少しでもできるように精進したいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

◆ Simon Tuchais (上智大学)

フランス語学を専攻することを決めたのは、大学3年生(Licence de lettres modernes)の時でした。それ以前から言語に大きな関心を持っていましたが、まだ文学にも興味をひかれていました。しかし、パリ第4大学で受けたフランス語の文法の授業は私の進路を決定づけました。その後 Robert Martin 先生等の授業を受けながら Olivier Soutet 先生のもとでフランス語の名詞文について論文を執筆、続いて agrégation de grammaire を取得しました。

学生の時にフランス語学を勉強しながら日本語も勉強していたので、agrégation を取得後は日本語を対象にした言語研究へ向かいたくなりました。そこで、Irène Tamba 先生のもとで日仏対照言語学研究を始めました。このころ取り扱った研究テーマは思考動詞表現などで現在も継続して研究しています。またフランスと日本における「モダリティ」などのような用語の比較も行っています。これらの研究を深めるために東京大学大学院の日本語学専攻に入学しましたが、そこでポリフォニー理論など、フランスの言語学理論を活かし日本語の思考動詞表現の分析を試みました。

大学院在籍中はしばらく日本語学に集中するようになりましたが、その間フランス語学との繋がりを保つのに役に立ったのは定期的に通っていたフランス語学会の例会です。去年上智大学フランス語学科に着任しフランス語学がまた活動の中心となった今、このフランス語学会で編集委員を務めさせていただくのを光栄に感じています。編集委員としてどのような役割を果たすことができるかまだよくわかりませんが、できる限りやり遂げたいと思います。

4. 本年度編集責任者より

本年度は私、井元が編集責任の役を引き受けさせていただくこととなりました。幸い私が所属しております大阪大学言語文化研究科の同僚に、過去編集責任を経験した方が3人もおられますので、そういった先輩方のアドバイスも得ながら1年間つとめさせていただ

きたいと思います。基本的な編集方針としては従来から続いている伝統をいかしつつ、これからの発展につながるような豊かな紙面作りをめざしたいということです。

先日編集責任を引き受けることになって、過去の投稿規定と現在のそれとを改めて見返してみました。今から20年前の22号(1988)では「投稿原稿は、論文、研究ノート、論評、紹介、その他とする」とありますが、前回の41号(2007)では「投稿原稿は、論文、研究ノート、論評、紹介、フランス語メモ、新刊紹介などとする」とあり、投稿の種類がひろがってきていることがわかります。実際には「フランス語メモ」というカテゴリーで書かれた記事はないのですが、「その他」の中には「語法ノート、文献案内、展望、情報ファイル、対照研究、誌上討論、資料、誌上シンポジウム」などがあり、40号からは「フランス語質問箱」も加わりました。それぞれの号が伝統を生かしつつ、独自の色合いをだしていることがうかがえます。私としても他の編集委員のみなさんと相談しながら、幅広い範囲で記事を集めることができれば、と考えています。一方で、専門研究の最先端を切り開くような論文があると同時に、資料や情報提供の性格の強いもの、それに啓蒙的な記事などもあって、専門家から学生さんまで誰が読んでも役に立つような紙面作りができればと思うのです。まだまだ未熟者で、このような大役をお受けするような柄ではないのですが、本会の発展のために少しでもお役に立てれば、と思っております。どうぞ編集委員をはじめ、会員皆様方の協力をよろしくお願いいたします。

(井元 秀剛)

5. 運営・企画担当より

2007年度は、5月18日に木下光一先生(獨協大学名誉教授)による特別講演会「フランス語学会40周年によせて」が開催されました。また翌日にシンポジウム『視点をめぐって』--言語学と文学の観点から」が開催されました。いずれも会場は明治大学です。2008年度は5月に青山学院大学でシンポジウム「構造主義とは何だったのか」の開催が予定されています。

2008年度より、例会は慶應義塾大学三田キャンパスで行われることになりました(5月と11月を除く)。偶然にも運営担当者の勤務校ですので、会場の手配などはスムーズに行えることと思います。

今年度の運営委員は、関東は(正)喜田浩平(慶應義塾大学)が担当します。副担当は未定です。関西は(正)平塚徹氏(京都産業大学)と(副)大久保朝

憲氏（関西大学）が担当します。今後とも皆様のご協力をお願いいたします。

（喜田 浩平）

6. 例会予定

6月28日（土）

慶應義塾大学（三田）525A 教室 15:00-18:00
西井研二（関西学院大学大学院）「avec N と -ment の副詞の使用の違い」（仮）

他一名未定

7月20日（日）

慶應義塾大学（三田）103 教室 13:00-16:00

発表者未定

9月27日（土）

慶應義塾大学（三田）525A 教室 15:00-18:00

発表者未定

10月25日（土）

慶應義塾大学（三田）会場未定 15:00-18:00

川口順二（慶應義塾大学）題未定

他一名未定

11月23日（日）

京大会館 14:00-17:00

安西記世子（大阪大学非常勤）題未定

西村香奈絵（神戸女子大学非常勤）題未定

12月6日（土）

慶應義塾大学（三田）会場未定 15:00-18:00

発表者未定

7. 各地の研究会だより

◆フランス語学を一緒に勉強する会

これまで、毎月一回、3時から6時まで研究会を開いてきましたが、昨年参加者の減少、二次会への参加のしにくさなど、幾つかの問題を解決するために、開催時刻その他の点で多少の変更をすることになりました。まず、勉強会の時間を2時から5時までに変更しました。こうすることで5時から6時までは喫茶店で気軽にコーヒーを飲みながら雑談をする時間にできるのではないかということで、さっそく10月から開始時間を2時からに繰り上げることになりました。また、他の学会と重複する春（5月または6月）と秋（11月）の月に開催することはかなり無理があるため、当面、この両月はお休みにすることにいたしました。しばらくこのような形でやってみて、また変更する必要があるれば、身軽な小さい研究会の利点を生かして実情に合わせて変更していくつもりです。研究会のありかたに関して、みなさんからの御意見、御要望、御提案など

がありましたら、どうぞ世話人までお知らせください。

昨年度は以下のような発表がありました。

4月14日 川口順二（慶応大学）「Aller と未来」

6月9日 安齋有紀（青山学院大学大学院 DC）「日仏両語における主体間調整の対照研究」

7月7日 志村佳菜子（慶応大学大学院 DC）「雑誌広告における借用英語について」

9月22日 塩田明子（慶応大学非常勤）「de の総合的理解へむけて」

10月20日 三浦龍介（青山学院大学 MC）「Enoncés détritmentaux をめぐって-- être + à + infinitif」

12月8日 藤田知子（神戸外語大学）「Etes-vous théâtre ou cinéma? 構文 日仏対照」

勉強会での発表を希望する方は世話人、川口順二 <jnkawa@attglobal.net>, 前島和也 <kazuyax@econ.keio.ac.jp>, 大久保伸子 <okubo@mx.ibaraki.ac.jp> まで御連絡下さい。論文や著書の紹介・論評なども歓迎いたします。案内はメールリスト Frenchling でのみ行い、郵送による通知は行っておりません。Frenchling に加入しておられない方は世話人のアドレスにお知らせいただければ、個人宛にメールでご案内します。

なお、今年度前期の予定は以下の通りです。

4月19日（土） 川口順二（慶応大学）、中尾和美（東京外国語大学非常勤）、志村佳菜子（慶応大学大学院 DC）「ブランド名・商品名をめぐって」

6月14日（土） 発表者未定

7月（日にち未定） Tuchais Simon（上智大学）「発表題目未定」

（大久保伸子）

◆関西フランス語研究会

関西大学を会場に、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。秋には日程の調整が難しくなかなか開くことができませんが、月の後半の土曜日に1回行うことを原則としています。時間は、原則として、午後2時から5時です。昨年度の発表は以下の通りです。

4月

安西記世子「複合過去の機能に関する一考察」

5月

東郷雄二「状況モデルによる半過去分析の試み」

6月

井元秀剛「日本語とフランス語における時制選択

のずれについて — メンタルスペース理論の観点から」

7月

西井研二「フランス語における結果の副詞」

12月

安西記世子「出来事の推移にかかわる複合過去の価値」

2月

春木仁孝「核施設は無能力化できるか — 再帰構文受動用法とモダリティー —」

この研究会の趣旨は、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために、あるいはまた、関東で発表を終えた人が関西でそれを聞けなかった人のリクエストにこたえてというように、形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、最近の研究発表が中心ですが、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎しますので、発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください。昨年とはまたま学生の方の発表が少なかったのですが、アットホームな雰囲気集まりですので学生の方も遠慮せずにどんどん発表してください。

案内はメーリングリスト Frenchling のみで行っていますが、加入されていない方は世話人までアドレスをお知らせいただければ、個別にメールでご案内いたします。

平塚 徹 : hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲 : tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

(平塚 徹)

8. いま、フランスでは...

今回は、現在フランスに留学なさっているお二方に、それぞれカーン大学、パリ第3大学の状況を伝えていただきます。

◆ 新谷 真由 (カーン大学博士課程)

2006年度よりノルマンディー地方にあるカーン大学博士課程に登録し、学位論文の執筆に取り組む日々を送っております。今回は私がいかにしてこの大学に辿り着いたか、そして所属する研究科でどのような教育と研究活動がされているかを簡単に述べたいと思います。

私は修士論文は日本の大学で提出しましたが、博士論文は是非フランスの大学で提出したいという希望を常々抱いておりました。丁度フランスでは2006年度から大学制度改変(フランスのDEAがなくても博士課程

進学の権利が貰えるようになる、等)が実施されたため、このようにフランスのDEAのない私でも博士課程に登録する機会が得られるようになりました。さて、このようにフランス行きを決心してからまず最初に始めることは博士論文の指導をしてくれる教官を探すことです。私は大学登録の始まる約半年前の段階から行動にでました。今から思えば少々荒っぽい方法だったかもしれませんが、フランスの様々な大学の教官に研究計画書を添付したメールを直接送りつけて指導受け入れをお願いする、という一見するとスパムメールと間違われそうなアプローチを試みました。この時6件ほど出して、実際に返事が来たのは4件でした。どの返事も非常に誠実な内容のものでした。(中には指導する学生が多すぎてこれ以上受け入れることは出来ない、と丁寧に断りの返事を下さった方もおりました。)この中でも最も私の研究計画書に興味を示してくれたのが、今現在の指導教官です。返信内容にはいくつかの質問(なぜ自分なのか、自分のどんな論文を読んだのか、他にどの教官にメールを送ったか、資金面の問題はないか、等)が添えられていました。その後何度かメールにてやりとりをした結果、受け入れを承諾してもらえた次第でした。見ず知らずの外国人に数回のメールのやり取りをただでvisa申請の書簡を郵便で送ってくれた、この教官の潔さには今も脱帽する思いとともに感謝の気持ちで一杯です。

さて、このようにして辿り着いたカーン大学ですが、言語学を志す者は教官であれ、研究者であれ、博士課程の学生であれ、皆、同じ研究所「CRISCO (Centre de Recherches Interlangues sur la Signification en Contexte (FRE 2805))」に所属することになります。現在この研究所に所属する博士課程の学生数は30人、教官・研究者数は25人です。また「Inter-langues」と謳うだけあって、様々な言語の研究者がおります。(ちなみに私は元が英語ゆえにフランス語・英語・日本語の比較研究をしておりますが、ここで違和感を感じることは全くありません。)また、純粋に言語学ばかりをする研究者だけがいるのではなく、エンジニアも数人所属するなど、学際的な面もあります。彼らは研究所のサイト上で動かせる「多義語辞典」や「合成音声」の製作にも携わっております。設備面については、言語学関係の図書館、博士課程の学生用の学習室、教官・研究者の個室が設置されています。学生用の学習室には7台のパソコンが常設されており、Frantextも自由に利用することが出来ます。また、この研究所の主な刊行物には「Syntaxe & Sémantique」と「Cahiers du CRISCO」があり、対外的な活動としては年にそれぞれ一度の割合で

Journée scientifique と CNRS との共同で行われる国際学会を催しております。2007-2008 年度の国際学会は「Autour de la préposition」という題目で、Journée scientifique は「Exploration de corpus textuels en Sciences Humaines」という題目で行われました。特に、Journée scientifique は教育的配慮のなされたシンポジウムであり、コーパスの使用方法を紹介すると共に、各分野からの研究者による実践研究報告などがなされ、非常に有用、かつ興味深いものとなりました。

CRISCO (<http://www.crisco.unicaen.fr>)

◆ 神山 郁子 (パリ第3大学修士課程)

私は、現在パリ第3大学言語学科 (以下パリ3) の Master 課程に留学しています。2006年9月に渡仏し、昨年度は Master1 (以下M1) に、今年度は Master2 (以下M2) に在籍しています。パリ3では昨年度から LMD 新制度に移行したようで、我々の学年が新制度での Master 課程の2年間を終える初めての学年だそうです。授業は、Censier と ILPGA (Institut de Linguistique et Phonétique Générales et Appliquées) と呼ばれる校舎の2箇所で行われています。

カリキュラムは、なかなか大変なものになっています。M1 では、年間で6つの総合科目、5つのゼミ、2つの選択科目、6つのパソコンの授業、Mini-mémoire という修論の前段階となるものを書くことが義務になっています。総合科目とは、音声学、形態統辞論、意味論、談話分析、社会言語学、通時言語学、言語教育学、言語思想史など、言語学の諸分野の基礎科目で、複数の教員によるリレー講義の授業です。ゼミは、各先生の専門分野の授業です。選択科目は、文献の探し方、英語、統計学等、多岐に渡っています。パソコンの授業は、休みの期間に行われる、1つにつき7時間の授業です。PRAAT など言語学関係のものから、Word、PowerPoint といった基本的なものまであります。総合科目では期末試験、ゼミと選択科目では、それぞれの授業で期末試験と課題 (A4用紙10~20枚程度) 提出の両方があります (プレゼンを行う授業もあり)、全てに20点満点で点数がつけられます。M2 への進級の条件は、成績が基準点を満たしていること、Mini-mémoire を提出していることです。指導教官はM1の後期の初めに決めることになっています。基本的には Master2 年間の指導教官になるのですが、M2 になって指導教官や論文のテーマを全く変えるという学生もわりといるようです。

M2 では、年間でゼミ8つ、選択科目1つ、パソコンの授業3つを取ることで、修論を書くことになってい

ます。ゼミは、上限がありますが他大学のゼミも単位として認められます。修論提出後には3人の先生による口述審査が行われる予定です。口述審査を受けるには、すべての授業を履修し、成績を満たしている必要があります。

私が個人的に興味を持ったゼミは、話し言葉フランス語に関係する内容のゼミで、Mme MOREL M.-A. / Mme CANDEA M. 「話し言葉分析①②」、M. LE GOFFIC P. 「文法、テキスト文法」、M. CHAROLLES M. 「コネクターとテキスト構造」、M. MARTIN Ph. (パリ7) 「イントネーションとマクロ統辞論」です。それから、博士課程のゼミになりますが、M. LE GOFFIC P. の「語順」です。

図書館は、Censier にパリ3の中央図書館と学会誌などの雑誌の図書館があります。どちらも開架式で、特に雑誌の図書館には主要なフランス語学の雑誌は収容されており、自由に閲覧することが出来るので便利です。他に開架の図書館ではパリ5があります。BIU (ソルボンヌ) の図書館は、開架ではありませんがたくさんの本・雑誌が所蔵されています。

それから、パリ3の図書館のウェブサイトには、Virtuose という、電子化された雑誌や、Frantext 等様々なデータベースが自由に使えるサイトがあります。学生証にある IBN 番号で、どこからでもアクセスすることが可能です。

今年度は、前期に全国的に起きた Loi d'Autonomie des Universités に反対する学生達によるストライキで、パリ3でも5週間もの間大学が封鎖されました。そんな想定外のことも起こりますが、常にフランス語を聞いたり話したりする環境に身を置くことは、フランス語に対する興味を益々増し、大変勉強になります。留学出来たことに感謝し、残りの期間も日々大切にしながら、修論を初めとして頑張りたいです。また、パリの空気に触れて書物だけでは得られない実感を精一杯経験していけたら良いです。とはいえ、大学がなかなか大変でありあまり余裕がないのですが...

9. メーリング・リスト frenchling について

frenchling はフランス語学のメーリング・リストとして1996年3月に立ち上げました。それ以来、フランス語学会、フランス語談話会や各種研究会の案内をはじめとして、フランス語学関係の議論、情報交換に貢献してきたのではないかと考えています。立ち上げ以降一貫して大阪大学言語文化研究科のメールサーバーを使って配信してきましたが、2008年3月から阪大言文のネットワーク自体が外部委託されることとなり、こ

れまでのように frenchling の管理を我々管理グループの手元で行なうことができなくなりました。このため、frenchling を Yahoo! Groups のメーリング・リストとして運営していくことにしました。

すでに frenchling でも詳しい案内のメールを管理グループからお送りしていますが、今回このニューズレターに frenchling 紹介のスペースを頂くことができましたので、これを機会にもう一度、新しく Yahoo! Groups のメーリング・リストとして運営しています frenchling について、特に各種手続きをまとめて記しておきます。

まず入会ですが、frenchling はフランス語学に関する学術メーリング・リストという性格上、どなたでも入会できるという仕組みにはしていません。新規に参加を希望される方は、登録用のアドレスと所属、登録を希望する理由を書いて以下の管理グループのアドレスまで、メールで申し込んで下さい。

管理グループアドレス：frenchling-owner@yahoogroups.jp

入会して頂くかどうか管理グループで判断する際に、登録を希望する理由がほとんど唯一の判断基準となりますので、「フランス語に興味があるから。」といった漠然とした内容ではなく、〇〇大学の大学院でフランス語学を専攻している等、できるだけ具体的に書いて下さい。

次に退会についてですが、退会を希望される方は、Yahoo!グループのサイト (URL は下にあります) でご自身で簡単に退会の手続きをすることができますので、各自で手続きして頂くようお願いいたします。手続きをすると、Yahoo! から退会確認のメールが届きます。

なお、これまでも、所属が変わられたりしてアドレスが無効になっても、管理グループに連絡せずに放置される方がおられました。アドレスが無効になると、投稿があるたびに配信エラーを知らせるメールが管理者全員に送られ、大変迷惑になりますので、退会される場合は必ず退会手続きをして下さるよう重ねてお願いいたします。

最後に登録アドレスの変更についてです。アドレスの変更に関しては、これまでとは手続きが変わります。まず変更前のアドレスに関して各自で上記の退会手続きをして下さい。その後、新規登録と同じく管理グループまで新しいアドレスをお知らせ下さい。その際、アドレス変更の申請である旨と、古いアドレスの方の退会手続きはすでに済ませてあることを確認のために明記しておいて下さい。

なお、退会の手続きや、Yahoo! グループの基本的な使い方等は

<http://groups.yahoo.co.jp/local/info/guide/main/index.html>
<http://help.yahoo.co.jp/help/jp/groups/>
を参照して下さい。

現在、大阪大学言語文化研究科の井元秀剛、岩根久、春木仁孝、三藤博の4名で frenchling 管理グループを構成し、frenchling の運営全般に共同して当たっています。言うまでもありませんが、全員大変多忙な中をボランティアとして frenchling の管理を行なっていますので、専従事務局のような対応は不可能であることをどうかご理解下さい。

なお、frenchling は日本フランス語学会の活動ともちろん密接に連繋してはいますが、本学会のメーリング・リストというわけではありません。ですからこれまで、学会内部のみの連絡には使わないようにしてきましたし、今後ともそのようにお願いいたします。

Yahoo! Groups のメーリング・リストに移行する前の frenchling の過去ログについては、愛知大学の中尾浩先生と京都大学の東郷雄二先生のご厚意により、

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/fling-arch/fling.html>
で読むことができるようにして頂いています。

最近では、フランス語学会や東京と関西でそれぞれ開催されている研究会の案内などが投稿記事の中心を占めていますが、せっかくのフランス語学専門メーリング・リストですから、また以前のようにフランス語学に関する議論が盛り上がることを期待しています。

(frenchling 管理グループ)

10. 編集後記

今回からニューズレターの編集を担当することとなりました。どうぞよろしくお願ひいたします。執筆者のみなさまのご協力のおかげをもちまして、なんとか発行にこぎつけることができました。また、レイアウトと版下作成、印刷所との打ち合わせは平塚徹さんがご担当くださっています。ありがとうございます。

(渡邊 淳也)

ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>